

Ida Bromley(著)/荻原新八郎(訳)

## 四肢麻痺と対麻痺(第2版)

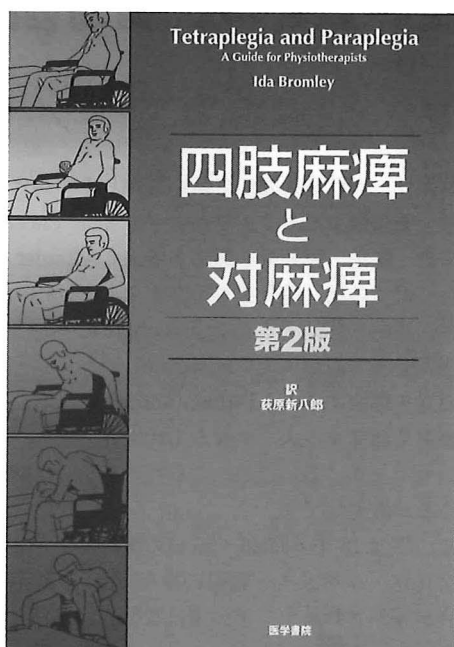
高橋正明

(昭和大学医療短期大学理学療法学科)

アイダ・ブロムリ著の「四肢麻痺と対麻痺」第5版が翻訳され、医学書院から出版された。訳者は初版(原著第3版)と同じく荻原新八郎先生である。内容は脊髄損傷に係る生理学、急性期の理学療法からリハビリテーションまで網羅され、初版と基本的な流れは同じであるが、新たに、上肢の機能的電気刺激、姿勢と座席適合、C1、2レベルの超上位損傷者の治療、および脊髄損傷者の老化による諸問題が取り上げられた。また、章立てや項目立てにより吟味し工夫した様子が見え、例えば「自己介護」の項目が「個人的自立」へ、「マット上動作」が「基本的実用動作」へと変更されているように、患者主体の視点が明確に打ち出されているのである。そして何よりも嬉しいのが、第3版に比べ1つひとつの説明がとても丁寧になされていることである。

ずっと以前であるが、英国人の書くものは内容が実にプラクティカルであるという印象を持った。プラクティカルといえば、すぐに米国人を思い出すが、彼らのように常に理屈がついて回ると違い、英国人は、実用的で役に立つ知識をけれんみなく読者に提供してくれる。そのためか、なるほどと思うことよりもハッとさせられることの方が多い。本書の初版を読んだときも同様に感じた、しかも著者が原著第1版で述べているように、理学療法士および学生のために臨床場面での手引き書を作るという明確な意図を持って書かれた実用書である。教わることが多かった。

しかしながら、初版はけれんみが無さ過ぎた。表紙は色が地味でタイトルの文字が小さい。中は段組を組



んでおらず白い部分がやたらと目に付く。ほとんどの説明図が手書きの絵である。そしてさらには説明が淡泊で、とにかく今様に一言で表現すれば体裁がグサイのである。それが第2版では見事に変身した。まず、表紙が別物と思えるほどアピール力を持った。初版と第2版を並べて学生に取らせると間違いなく第2版を選ぶ。中は2段組となり、専門書らしく読みやすい。写真による物品の提示が増えた。手書きによる説明図は以前と同じであるが、体裁が良くなると主張したいところが容易に表現できる手書きの良さが逆に引き立つ。読んでいて、とにかくハッとさせられることの多い1冊である。

● B5 頁246 図228 写真492 表17 1999  
定価(本体4,800円+税) 円400 医学書院・刊